

---

# 殺人項

こたろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺人項

### 【Nコード】

N9735U

### 【作者名】

こたろう

### 【あらすじ】

楽しいような暗いような短編集

## 1 時を止めた姉妹

「やったな妹よ。私達二人を除くみんなの時間が止まったぞ！」

平日昼間の通学路で私は妹の手を握り、ぶんぶん上下に振る。周囲には、不自然な姿勢で動きを止めた通行人達。午前八時に私達姉妹以外の時間が止まる。今日見た夢のお告げ通りになったのだ。嬉しい、嬉しいっ！

「何が嬉しいと。世界中が止まった確証ないし。みんな止まったフリしとるだけかもしれんし」

「へへへ、今のうちに悪戯いっぱいしちゃうのだっ」

「お姉……」

私は両手を上げてだばーっと走って、交差点を曲がる。通学中の女子高生を発見。パンツをひっ掴んで一気に下ろす。

「やったーっ」

「お姉、そんなオヤジみたいなこと……」

「女子高生はム力つくんだっ！ 私の元彼が女子高生に奪われたから！」

「お姉も来年は女子高生なのに」

「来年なんてこないよっ。ずっと私達以外は動かない置物なのだ！」

ふはははと笑いながら私は駆け回った。有頂天すぎて足元を見ていなかったのだ。私はニブロック空いていた道端の側溝に足を引っ掛けて変な形に転落した。

「お姉！」

「あうっ、いたい、いたいー」

側溝の中で悶える私。妹が心配そうに駆け寄る。

「血が出る。側溝の水は汚いから、病気になるっちゃうよ。病院に診せなきゃ」

私は妹の手を借りて側溝から這い出た。

「どうしよう、病院の人達も止まってたら、私ばい菌にやられて死

んじゃうよ」

「私が手当てしてあげるから。お姉がんばって」

私達が病院に着くと、医者も看護師さんもみんな動いていた。私は消毒してもらって、包帯も巻いてもらった。

後でまた通学路に戻ると、通行人のおじさんやお兄さんがいて、「すまないね。君が時間がもうすぐ止まると騒いでいたものだから、悪戯を試みたくなくてね」と謝りながら私達を迎えた。「俺達のせいで怪我させちゃったな。ごめんな」と、お兄さんは私達に五百円ずつくれた。

二人の後ろで女子高生のお姉さんが笑っていた。

「あたしは事情知らなかったんだけど、いきなりパンツ下げられて暴言吐かれてびっくりしたよー」

「すいません」

## 2 へたくそな私

私モテません。なんで初めにそんなこと言うかっていうと、よくモテるって勘違いされるからです。

可愛いとか美人って、みんなお世辞で言ってるんでしょ？ 鏡の前でどんな頑張っても、イマイチの域、出ないよ？

「永井さんがモテないのは、モテようとしなからでしょうね。自分から人を好きになったことあります？」

眼鏡くんはわざわざ首を傾げて訊く。ちなみに私は眼鏡くんの本名を記憶してない。私の前の席になった時から、眼鏡くんは眼鏡くんだ。

「ないですねえー」と私は返した。

「それでいてモテると思われるのも、自らモテようとしなからです。落ち着いてるからそう見えるんでしょう」

「うわっ、あたまいいねー。眼鏡くん」

すると、眼鏡くんは「それでもないですよ」と言いながら頭を掻いた。

ここで私は何となく教室内を見回す。眼鏡くん越しに首を伸ばして前の方をまず見て、次に後ろの方を振り向く。すると、最後列の席で友達と話す姫華ちゃんの姿が目に残った。

姫華ちゃんは名前の通りの可愛い女子だ。みんなが姫華ちゃん姫華ちゃんと呼ぶから、私は姫華ちゃんの苗字を知らない。

「姫華ちゃんはモテるけど、何か秘訣はあるんだろうか」

「それを僕に聞かないで下さいよ……。でもですね……」

聞かないでと言いつつ何か言おうとする。そんな眼鏡くんを、私は「いよっ、ノーベル賞」ともてはやした。

「モテる人は僕とこんな風に話したりはしないでしょね」

眼鏡くんは自嘲する感じでもなくて、悲しい顔でもなくて、ただ

事実を述べるように言った。

眼鏡くんはいつもそうだ。普段は格好悪いを基調とした色。でも、こういう時だけやたら格好つける。私なんとなく、眼鏡くんがモテないとしたら、理由はそこなんだってわかる。

「眼鏡くんと話したりするの、女として駄目かな」

私は下の方を見てぼそと呟いた。呟いてから視線を上げて伺ってみると、眼鏡くんは何だか狼狽えていた。

じんわり暑くなってきた季節の、昼休みのことだった。

\*

見えないプレッシャーにさらされて、意味もわからず動く人がいる。

私のお父さんがそうだと思う。

「真美ちゃん、そこどいてくれえ」

リビングの床で読書していた私は、後ろからクイックルワイパーをかけてやってきたお父さんを見上げる。確か今年もう四十のお父さん。

汗だくじゃん。

私がテーブルに移動すると、お父さんは「ごめんな」と言って、床に汗を撒き散らしながら通過する。

掃除する意味ない気がするけど、お父さん頑張ってるし、放っておこう。

お父さんはせっせと働く。意味ないことも面倒臭がらずにやる。何がお父さんをそうさせてるのか、私にはわからない。

お母さんがさせてるのか。

会社かな。

お父さん自身かもしれない。

私は、人の顔や挙動を見て、話した感じとかで、その人の危うさみたいなのはわかる。大人だから泣けなくて、嘘ついて爆発しそうになつてたり、悪循環してるように見える。

それって多分よくあることだけど、自分のお父さんがそうなのが、私は少し悲しい。

リビングにはテレビと、本を読む私と、お父さんだけ。

私はお父さんに気軽に話しかけられなくて困る。

普通じゃなくてもいいから、お父さんだけのお父さんでいてくれたら、私は好きなんだけどな。

「お父さん」

「……」

無言で。お父さんの私を見る力んだ目が、なんか嫌だ。

\*

私自身あまり気にしてないけど、お母さんは結構私に手を焼いてる。

全然気にしてないけど、私ム力つかれてる。よく怒られるし。

眼鏡くん風に言うなら、もし私が少しでも気にしていれば、ム力つかれたりはしてないだろう。

つまりお母さんはそういう人なんだ。私の平気そうな顔が気に食わないってこと。

別に悲しくない。

好きなところはちゃんと好きだし。私のお母さんだしね。

だって私も悪いし。この時期だと、うっかりリビングのエアコン切り忘れて部屋に行っちゃったりとか。普通に良くないし。

でも、家にお客さんが来た時にニコニコしなきゃいけないって強要されるのだけは絶対いや。一回やってみただけ、自分がヘンになりそうで怖かったよ。

お母さんはそこだけとにかく頑なで、私はそんなお母さんが嫌いかもしれない。

お小遣いとか、物とかもそんな要らないよ。だから、私のことを歪めないで欲しい。

「真美、お母さん真美のこと好きだよ」

だから何。

私にもそれを言わせようっていうの？

笑顔作ってそれを言ったら大人になれるんでしょ。

絶対言わない。

私は子供のままでいいし、そんなことで人間が区別されるのはおかしいよ。

私は黙ったまま。

お母さんの目つきがきつくなっていく。

なんで優しくないの。言うことを聞くロボットにしか優しくないの。

その目、私のことほんとに嫌いなんだってわかるよ。

いいよ、私も嫌いだもん。

お母さんは「育ててやったのに」って顔してる。こういう場合にお母さんがそう思うこと、普段の言動見てればわかるよ。

それが間違ってるとは思わないし、私が間違ってるかもしれないけど、私はそんなお母さんを認める生き方が思いつかない。

プロスポーツ選手とか、かっこいい歌手とかはちゃんとやれてるんだらうなって、たまに思うこともある。だって、成功してる人た



ちだから。

でも、本当に全部のことに満足して死んで行った人なんていないんだよ。ウィキペディアで見られるけど、どんな成功者でも、凡人に近い人でも、みんな苦悩して、傍から見て破滅的に、悲しい中で人生を終えてる。

だから、だから、きつとお母さんを認める生き方もないよ。あつたとしてもそれは嘘をつくことで、私の本意じゃない。

わかってよ、大人ならさ。

それとも、それをわからないのが大人なの？

そんな態度でいる私の前で、さっきまでニコニコしてたお母さんは荒れた。女の癖に物に当たってた。手当たり次第、皿を割った。

私はリビングから退避した。一人で暴れて、かといって自己完結できず私に投げかけるようなお母さんの悲鳴を背に、私は階段を上って二階の部屋に行くか、外出するかを迷った。

声を聞かせることがお母さんの狙いだ。それにわざわざ乗ってやるのも変な話だし、私はバッグだけ持って玄関から外に出ることにした。

泣くのはいつも私じゃない。お母さんだ。

お母さんに産んでもらった恩って、確かにある。反対に、勝手に生んだ女という見方もある。

私は多分生まれて良かったし、感謝してるけど、それと支配するのとは違う。私という人間を、下手な母性で殺されたくない。

十分程歩いて、たまに走って、家の周りの住宅地を抜けた。

少し見上げれば、綺麗な夕焼け空が空一面、贅沢に広がっていた。こないだいい景色なのに、今日は私今までずっと家にいた。日曜なのに。友達とあまり遊ばうとしないのも、お母さんを不快にさせる要因だ。

ていうか、私に友達っているのかな。

そんな疑問のプールが出来上がると、眼鏡くんの顔がまず先に浮かんできた。

彼はいい人だよ、と私は評する。ひょっとして、彼みたいに生きれば悩みなんてなくなるのかな。でもそれって、自分に嘘つくことにならないかな。

じゃあ眼鏡くんは自分に嘘をついてるのかな……。

自分に嘘ついてる人は、きっといい人に見えちゃうんだ。  
私だってお母さんと一緒じゃん。

けど私は、眼鏡くんがどんな奴だって別にいいと思うよ。彼は彼だし。私が好きくないお母さんやお父さんとは違うし。

ばったり眼鏡くんに会わないかな。

なんて考えながら、もう十九時なのに赤い空の下を私は歩いた。

\*

「永井さんおはよー」

と、眼鏡くんが私の前の席に鞆を引つ掛け、着席する。

眼鏡くんはやっぱりよく気づく人なんだろうか。その着席動作の中で、私の恐らく浮かない顔をチラチラ見ては、心配そうな表情を浮かべてくる。

「どうしたんです……？」

昨日結局帰ってぐっすり寝たから、今は割といつもの感じに戻ったけど、

「もし昨日あつてたら、私はお前をどうしていたかわかんないよ」

「お、お前！？　なんか恐いですよ、永井さん……！」

「いいよもう、付き合っちゃえばいいじゃん私たち……」

私がぼそつと言うと、眼鏡くんは椅子机ごと後ろにひっくりかえ

りそうになるくらい狼狽えた。

「なっ、なっ……ええ？」

「それが青春だよ」

「マジでどうしたんですか！」

きつと私がモテないのとか、普通に友達と遊んだりできないのか、お母さんを泣かせるのとかって、全部私がおかしいからなんだよね。

笑えばいいのかな。

「と、とりあえず……」

眼鏡くんはズレまくった眼鏡を何度も直しながら言った。

「僕、塾通ってて、そこに彼女が……。ま、まあそういう話じゃないんでしょうけど、一応！」

私は少し顔を上げて、改めて眼鏡くんを見た。かけた眼鏡のせいじゃない、中学生なのにしっかりした顔つきで、やっぱり心配そうに私を見守っている。

彼は大人。なんでも独り言みたいにどこも見ないで言う私は子供かな。

だから私、モテません。きつと子供だから。

「彼女いるのに話しかけないで」

きつと、大人と子供は根本的に合わない。

というより、誰かを好きになれない私が誰かに好かれるわけがない。私がお母さんから孤独だったのは、そのせい。

嘘をつけない私は、ずっと一人のまま死んでいく。

それでいいの？　って気持ちはざわつく。泣きたくても、私の涙はきつと誰にも理解されない。

悲しい気持ちのまま、人と向かい合う。ずっと下を見てる私に、誰も目を合わせることはできない。

彼も背中を向けてしまった。

### 3 帰還

「さあ着いたよ」

「ぐるうぐるう」

世界中を旅して回っていた僕とドラゴンの竜ちゃんは、一年ぶりに故郷の村に帰ってきた。

崖の上から見下ろす、農畜産で栄えた村の景色。一年前、旅に出る時に見たものと何も変わらない。

「父さん、母さん、みんな元気かな」

「ぐるぽん、ぐるぽん」

「降りようって？ そうだね、行こう」

僕たちは崖を少しまわって、村に降りる勾配緩やかな坂道を下った。

その間、僕と竜ちゃんは旅の思い出話をしたんだ。

「初日出会ったモンスターがあんなに強かったとはね。正直、竜ちゃんがいなかったらいきなり旅は終わってたよ。ありがとう、竜ちゃん」

「ぐる……」

「お礼なんてらしくないって？ 今ぐらい言わせてよ」

「ぐるう……」

竜ちゃんはたまに僕におばあちゃんみたいな顔をする。君はオスだし、僕より若いだろ。なんか無意味に憐れむなよ。

「魔王の刺客に心を奪われた時は焦ったよ。でも、灰色になった僕と一緒に心を取り返してくれたのもやっぱり竜ちゃん。ほんと今だから言えるよ、最高のパートナーだったって」

「やめてくれようぐる」

「あはは、今更人語かよっ」

そんな他愛もない話をしながら、僕たちは村の入口に辿り着いた。共同の郵便受け前で立ち話をしていたオジサン二人は、僕たちの姿

に青ざめていた。

村の中央道を進むにつれて、周囲はざわめきで蔓延していった。多めに距離をとった人集りが、僕たちについてまわった。

僕の家の前で、父さんが立ち尽くし、母さんは泣き崩れた。ボロボロになった竜ちゃんと、彼の抱えた小さな木箱を見て、二人は大きな嗚咽を上げた。

箱の中に入ってるのは、僕の顎の骨だ。魔王との戦いでは結局、そんな部分しか残らなかった。

「どいてっ！ どいて……」

人集りを掻き分けて、一人の少女が入ってきた。僕とこの村で兄妹同然に育った幼馴染だ。最後に見たときより髪も伸びたし、背も高くなった。経過した一年という時の長さを、僕は強く感じた。

彼女もまた、竜ちゃんと小箱を見て、最初は堪えていたけど、突然むせ返しては、ぼろぼろと涙を流した。

「ありがとう、彼も浮かばれぐる」

「……おまえッ！」

彼女は身の丈二倍ある竜ちゃんに掴みかかった。周囲はその瞬間にざわめいて、一部は目を覆った。

「おまえがあいつを旅にそそのかしたりしなかったら！」

「……」

竜ちゃんはほんととはビクともしないはずの身体を揺すらせてあげていた。平和の為とか、正当な言い分を飲み込んで、彼女の激昂に身を任せていたんだ。

彼女は更に竜ちゃんのお腹をバンバン叩く。その拍子に、手に持った木箱が転げ落ちてしまった。

中身がこぼれて、ひっという恐れにも似た悲鳴が上がった。彼女もそれを見て、それまでまだ強がり帯びていた顔は一気に崩れてしまった。

一時ばかり、村中に優しい泣き声が木霊した。悲しいことだけど嬉しくて、僕はそれで十分だったんだ。

「……私が行く」

うづくまつた彼女が、その時ぱつりと口にした。

「今度は私を魔王城に連れていって」

再度、竜ちゃんに掴みかかった。父さん、母さん、周囲の人たちが口々に「やめなさい」「命を無下にするな」と彼女を止める。

「駄目ぐる。これは彼の意味でもあるぐる」

「なんで！」

「ぐる……」

また竜ちゃんは老婆のような、言いたくても言い淀む顔をした。

僕と竜ちゃんは旅に出て、世界を見て、魔王と対面して初めてわかったんだ。彼に歯向かったこと、それ自体が間違いだったって。

確かに魔王の圧政は世界を苦しめている。辺境のこの村にまで、作物や家畜の強奪紛いの被害は及ぶ。けど、彼が天界に睨みをきかせることが、偽善者の天使たちへの抑止力になっているのも事実なんだ。

身の回りしか見ないまま、何も知らないまま不満だけがただつる。本当に変わらなきゃいけなかったのは、世界じゃなくて僕たちだったんだ。

「フライトレコーダー……」

静かな瞳で、彼女は竜ちゃんを睨んだ。

「政府が保有する機械に繋がば、ドラゴンの脳波から行動記録を解析できる……」

知っていたか。流石は勉強熱心な彼女だ。

「竜、自決しろ」

僕が言くと、竜ちゃんは牙を一本、器用に口内で折り、それを飲み込んだ。そしてすぐに吐血した。牙内部に仕込まれた毒だ。気高きドラゴンの誇りを守る為の最後の手段だと、旅の途中常々聞かされていた。それをこんな風に使わせてしまって、ごめん、竜ちゃん。驚くみんなの前で、竜ちゃんはその大きな身体をドシンと地に倒した。

あとはもう、見ていられなかった。彼女はとにかく泣きじゃくって、ナイフを取り出して死のうとまでした。

その様子は、僕にはもう悲しいだけだった。

「竜ちゃん」

念のため、空のどこかに向かって声をかけたけど、返答はなかった。ドラゴンの気高き魂は人のように浮遊したりしない。身体が朽ちると共にそのまま天に昇っていくらしい。天界の胡散臭い法の上では、モンスターを沢山殺した彼は重罪だろう。もちろん僕もだ。彼女と、父さん、母さん、優しい村のみんなに会えて良かった。最期にここに帰ってこれて良かったよ。

僕は天を仰いで、背中 of 剣をするりと抜いた。

「そんじゃ、いきますかい」

「皆殺しぐる」

たった今身体から抜け出た竜ちゃんの魂に、また会ったねと会釈をする。その背中に乗せてもらって、僕は空を昇り始めた。

旅をしてわかったことがもう一つある。僕たちの真の敵は、天界の大天使だということだ。彼を倒したのなら、常に上を睨んでピリついていた魔王も大人しくなる。世界は今よりもっと平和になることだろう。

新たな戦場へ、死してなお、盛んな僕たちは身を躍らせる。

ついでに言うなら、天界には違法な蘇生術が蔓延しているらしい。今度は本当に帰ってこれるかもしれないので、僕たちはまた一年前と同じように

「行ってきます」

と言って、朝焼けの空を駆けて行った。

### 3 帰還（後書き）

ALSOKのCM、「安心戦隊 ALSOK」が大好きです。



#### 4 ホームセキュリティ

「ベランダに不審者がいるんです。すぐ来てくれませんか……！」  
マンション提携の警備会社を私は今までに何度も呼んだ。

「不審者とかいませんな、お姉さん。あつ、お風呂場も見えていいですかあ」

「お願いします……」

今回も不審者はいなかった。私の誤認だったのか。私の部屋はマンション九階の超高所だし、警備会社のおじさんは私の通報を受けてすぐベランダに駆けつけたし、そう簡単に逃げられるはずないのに。

「……警備会社のおじさんっ！」

私は不安が頂点に達して、思わずおじさんに抱きついていた。

「うおほほ。駄目ですよ、お姉さん。ボク、今お仕事中」

おじさんは私の頭を撫でて安心させてくれた。私が怖い時にいつも来てくれるおじさん。ただでさえ一人暮らしで寂しい私。そんなに優しくされたら、好きになっちゃうよ……。

「レロレロレロリ！ でわでわ、今回も何も異常はありませんでしたので、ボオクは帰りますねえ！」

「待っておじさんっ！」

夕飯と一緒に食べてもらった後、いつも通り股間を激しくまさぐりながら帰ろうとするおじさんを、私は精一杯の勇気を出して引き止めた。

（今晚、一緒に寝てくれませんか……。一晩中、ずっと近くで私を警備してくれませんか……）

黙っている私に、おじさんは「何かあったらまた呼んでよあ」。待ってる、待ってる……」と投げキッスをして、玄関を出て行ってしまった。

駄目だよ私……。おじさんはお仕事なんだもん。他のお家の警備

もあるし、私一人ばかりに構ってもいられない。納得しなきゃ……。

不審者は以後何度も現れて私を怖がらせたけど、毎回おじさんが駆けつけて安心させてくれた。

数年後、私は思い切っておじさんに逆プロポーズした。おじさんは「ふひよ！ ボクなんかでいいならね〜」と私の我儘を快く受けてくれて、私達は結婚した。子供にも恵まれた。

元々高齢だったおじさんは早くにこの世を去ってしまったけど、いつも駆けつけてくれたベランダから、今も私達を見守ってくれている気がする。

「おじさん……」

「お母さん、一緒にお風呂入ろうよお〜。ボオクのおちんちん流し流しして〜」

## 5 電子アロー

電子アローというものがある。まあ電子メールのようなもの思っってもらって構わない。いや、電子メールとテレパシーの中間と言すべきか。

実際に使って説明しよう。

私は今から、ふと思いついた広告の企画案を、後ろのデスクにいる加山君に伝えようと思う。まあ頑張れば文字化や言語化も可能な内容だが、私はこの擬似テレパシーとも言つべき電子アローに乗せてイメージを送る。

携帯の上面を加山君に向けて、送信実行。私の脳波を読み取った携帯は、それを電波に変え、彼の所持する携帯へ。そこから脳用信号に変換され、加山君の認識の中へ。

加山君は右手を上げて了解の合図をした。

要は電子アローとは、視覚等を介さずに直接脳にイメージを送る技術ということだ。当然それは五感媒体に縛られないのだから、ビジョンから音から、感覚的な部分、果ては感情までも総合して伝えてしまう。

つまり、今加山君が私を微妙な顔で見てるのは、なんかもう加山君とエッチしたいよという感情まで送ってしまった為だ。

私はとりあえず右手を上げて彼に了解の合図をした。何が了解なのかわからないが。

しかし、こうまでイメージをダイレクトに、感情まで正確に人から人に伝えることが可能ならば、視覚や聴覚のみに訴える広告媒体に意味はあるのかと思う。

例えば今回のエッチに関しての私の感情の漏洩。これは決して口には出せない些細な気持ちだし、文字にだってできやしない。言語化した時点でそれは些細ではなくなるからだ。

“ひっそり想っている”というニュアンス、“口に出したら壊れ

てしまう気持ち”を伝えることができる時代が遂に来てしまったのだ。

だから私は加山君にばかり仕事でアローする。私の恥ずかしい気持ちに気づいた彼がその都度見せる顔が堪らなく好きだから。

## 6 女子高生殺人愛

アイドルの素養とは、言わばファンを殺すことにある。高次元のものに魅了され自己を失う人の様は、屍に等しいからだ。

女子高生アイには、幼少の頃からそれがあつた。

小学校三年時、アイは周囲の同級生、果ては教師、親まで取るに足らない者たちばかりだと思っていた。彼ら彼女らの話に基本興味はないが、話を振られれば返す。それだけだった。ただそれだけで、アイの持つ高位性は周囲に伝わった。

決して自己に反しないアイは、誰よりも自然な笑顔ができたのだ。

アイは中学の時、なんとなく興味本位で野球部エースの同級生とキスを試みた。ただ気まぐれにしてみた。

エースの彼は硬派な男だったが、それが切っ掛けになって軟派な中学時代を送った。アイのキスが元の彼を殺したのか、定かではない。

ただ、アイには人を心根から狂わせるカリスマ性があつた。アイの存在は通りすがったような関係の者にすらその印象を強く植え付けていった。

アイは高校で音楽に目覚めた。と言っても歌うだけ、しかもお世辞にも上手いとは言えない。しかし人前で歌うことが好きだった。

なんとなく出場したカラオケコンテストで、アイは三位に入賞した。微妙にふざけて歌った結果なので大満足であった。

味を占めたアイは、数々の歌唱コンテストを荒らして回った。いかんせん下手なので順位はまちまちだったが、楽しそうに自由に歌うその様は上位の人間よりもずっと人の目に残った。

最早当然の如くアイは芸能事務所からスカウトを受け、上京。東京の高校に通いながら女子高生アイドルとして活動することとなっ

た。

その歌唱力と奔放な振る舞いから当初はカルト的人気だったアイだが、次第に口コミで広まり、より大勢の人を魅了するようになっていった。

現在高校二年、十七歳のアイは、日本の高額納税者ランキングに名を連ねる程の誰もが認めるトップアイドルである。

「彼女はその愛で人を惑わすのだ。移り気で、気まぐれで、何より正直な愛。」

彼女のそれは、作られたものではない代わりに、商業的に繰り返されるものでもない。よって、彼女が飽きる時がくれば、ぷいと他所に行ってしまう。そこに人々はますます惹かれるのだ。

しかし彼女の行いは殺人行為に等しい。少し限りの愛を与えられた人々は、更にそれを求めて彼女を追う。

熱狂とは他者の追従。それは自己の追求とは程遠く、人々は彼女によって狂わされているのだ」

米哲学者マイク・カーボルトは、相田アイのファースト写真集を熱く握りしめながら語った。

## 6 女子高生殺人愛（後書き）

カリスマが凡人を狂わせる瞬間を目撃しました。

その時私はどこにいたのか。それは秘密です。

## 7 パーソナル崩壊現象

あなたが日々生活を送る学校や職場でこんな人を見かけることはないだろうか。

- ・喋るとき人と目を合わせない
- ・話がつまらない
- ・いるだけで集団の空気が微妙になる

彼らはしばしば、私たち正常な人間とは明らかに異質の存在であるという印象を受ける。積極的に自己を周囲に打ち明けないため、常に何を考えているかわからず、誰からの理解も得られない。孤独で悲しい人種である。

彼らは生まれたときからこうであつたのか。だとすれば先天性の障害として認められるだろう。

しかしそれは違う。彼らは人生のある時を境にしてこうなった。私が行った調査の結果、それはいじめ被害であることが大半であり、それ以外にも人間関係の悩みが原因であることがわかった。

そのターニングポイント以前の彼らは、私たちと同じように人らしく生き生きとした表情をしていた。ただし、いじめや人間関係のトラブルの原因は双方向性であるため、彼らはその頃から周囲とは少し違っていたことになる。『宇宙人』とあだ名されるような奇天烈な個性を持つ人がまさにそれに該当するだろう。

宇宙人の彼らは宇宙人なりに、周囲から冷ややかな目で見られながらも生き生きと活動していた。私たちとは相容れないながらも、個性を主張することはできた。

しかしそれは正常な人からすれば目に余る行いである。空気の読めない行動、調和のとれない行動。周囲はそれとなく注意をするだろう。だが彼らは聞き入れない。彼らの世界はやはり我々とは相容



れないものであるからだ。

やがて過激な人が彼らにきつく当たったり、いじめを行ったりし始める。仕方のないことだと私は思う。いじめやトラブルの原因は双方にあると私は言った。しかし、これは過激な人たちが彼らにスタンダードなコミュニケーションを理解させようという優しさであるとも言えるのだ。一方彼らは自分を守るのみで、他者の気持ちに目を向けようとしない。これは自閉症やアスペルガー障害との関わりもあるのではないかと私はそれとなしに思っている。

トラブルの過程で彼らはストレスを溜め、その結果、彼らの持っていた強烈な個性は影を潜める。傍目に大人しくなったとしか映らないこの現象、これがパーソナルの崩壊である。

彼らはその日から正常な受け答えができなくなる。

#### 例1

「昨日家でなにしてた？」

「別に何もしてないよ」

この会話例でおかしなところは何か。答えは明白だ。彼が家で“何もしていない”わけがないのである。この症例では、以前の彼は家でゲームをやったことや漫画本を読んだことを聞かれずともアピールしていた。

彼は自己を隠すようになった。周囲に本当の自分をみせなくなってしまった。

彼らの自己は壊れてしまったのだ。人が当然として持っている『顔』を、彼らは失ってしまったのだ。

彼らは必ずと言っていいほど恋人ができない。理解が得られないからだ。また、コミュニケーションが不得手な彼らは不清潔で、表情も変だ。これでは恋人はおるか友人の一人もできるわけがない。『宇宙人』の段階では、面白がって寄ってくる人や上手にフオー

を入れて盛り上げるタイプの人に支えられ、彼らは集団の中にいたし、同じように奇妙な人と恋仲になることもあっただろう。しかし、パーソナル崩壊後の彼らは、言わば人同士の繋がりの中に入る切符をなくしてしまったようなものだ。こちらの呼びかけに対し一言二言のつまらない返答しかできない彼らには、人間関係のはじまりというものがそもそも発生しない。

彼らは総じて学力が低く、運動も苦手だ。

一般にそれらは努力によって改善していくものとされるが、努力をするためにも最低限の条件が要る。それがパーソナルである。また『宇宙人』の話になってしまいが、彼らはその強烈な個性のために各分野の天才であることがしばしばある。周囲の流れを無視した偏向的な努力が可能であるからだ。

しかし、パーソナルが崩壊した後の彼らは実に哀れだ。個性を失い、言わば能力のパラメーターのどこも突出することがなくなってしまった。何事にも意欲がなく消極的であるがために、人並みのことでも満足にできない。更にコミュニケーション能力を完全に失ってしまったことが追い討ちをかけている。物事の上達のカギは他の人から得られる情報にあるためだ。

図1

A（宇宙人、自閉症、アスペルガー）

（パーソナル崩壊）

B（パーソナル崩壊者）

彼らは当然ながらまっとうな職には就けない。よって、今の非正規労働者の殆どがこのパーソナル崩壊者であると思われる。笑顔がなく、能面のような顔の人種。正常なコミュニケーションができず、時に相手を怒らせ、集団から孤立する人たち。

彼らを正常に戻す手段はあるのか。恐らくないであろう。彼らは

もはや望んでこうなっているのだから。彼らの思考が既に元凶なのである。となると、これは先天性の障害と捉えてやはり間違いない。私たちはただ見守るのみである。時におかしな返答や通じない会話に苛立ちながらも、彼ら身近な異人と上手に付き合っていく他に道はないのだ。

大学教授、石原龍之介の著書『パーソナル崩壊現象』は計百部も売れなかった上、彼は出版の数カ月後、何者かに惨殺されました。

8 (終) 老人と紐 (前書き)

評価依頼中

## 8（終） 老人と紐

今年八十九の白川老人が一人暮らしをする古い一軒家の軒先に、一本のくたびれたゴム紐のようなものが落ちていた。元々厳格な顔をしていた彼は、なおのことしかめ面でそれを拾った。

「馬鹿餓鬼ども」と吐き捨てる。

白川老人の中で、自分より若い連中は総じて？なつて？いなかつたが、殊に近所の小学生の行動は目に余る。夕方に鳴る呼び鈴は最早確認の必要すらなく彼らの仕業だ。最近はいいい加減、無視を決め込んでいる。

ゴム紐はよく伸びた。素直に捨てるのも癪だったので、室内用の簡易物干しに使ってやろうかと考えた。八畳の空き部屋の、以前は額がかかっていたフックに紐の一端を結びつける。その反対側の、とりあえずカーテンレールにもう一端を結んだ。

試しに今着ていた黒革のジャケットを紐にかけてみたが、伸びすぎて、あまりに駄目だった。紐は室内でV字の形となり、ジャケットは畳についた。

「餓鬼ども」

「白川厳五郎が出たぞ」

数分後、白川老人は小学生と対峙している。家より出て、角を二度曲がった地点で、三人組の男女混合グループと睨み合う。女の子は一人だったが、この仕様もない悪戯に女子が加わっている事実、白川は流石に気分を害された。

ゴム紐を両の手で伸ばす。「ゴミは家に持ち帰れ」

「じいさん頭おかしくなつた？」長髪の男子が言った。白川老人は紐を縦に構えて、その彼を狙う。一端を思い切り後方に引いて、離れた。ゴムは面白い程よく飛んで、二メートル先の少年の胸に当たった。くつついて離れない。これは老人にも予想外だった。

「なんか飛ばしたぞ」

「気を飛ばしたんだ、きつと」子供たちは紐に気づいていない。

「なんだか、不気味」女の子が言って、恐怖の面持ちは伝染した。次の瞬間には三人とも踵を返して、老人の前から駆け出していた。ゴム紐が少年と老人の手を繋いだまま、ぐんぐんと伸びていく。何も思わず、その手を離れた。ゴムの一端は凄まじい勢いで少年を追いつ、道路で一度ばちんと跳ね返り、軌道が逸れた結果、横を走っていた女の子の背中に当たった。

少年たちは路地の角を曲がって、見えなくなった。

数日が経って、夕方、白川老人宅の呼び鈴が何度も鳴らされる。まるで逃げる気がないように、何度も繰り返し呼び鈴は押される。肝の据わった悪戯だ、と妙な感心して、白川は未だチャイムの鳴り続ける中、玄関の戸を開けた。そこには、先日のお学生の一であり、長髪でない方の少年がいた。

「すみません」と元気がない。白川は拍子抜けした。

彼を客間兼の居間に上げ、煎餅と茶を出した。

「あの二人の様子がおかしいんです」茶と菓子には手をつけずに少年は語り出す。「付き合ってるみたいなんです。あの日から急に仲良くなりだして」

老人は瞠目する。

数日後、ゴム紐はまた白川老人の手にある。少年と協力をして、待ち伏せを行い、例の二人から紐を取り外したのだった。その後の二人は元の友人関係に戻ったらしい。

白川は八畳の空き部屋に入った。仏壇の前に立ち、仏飯が供えられた横に、紐をするすると落とした。

黒縁の写真立てを一瞥して老人は言った。

「まったく、馬鹿な話だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9735u/>

---

殺人項

2011年12月25日12時53分発行